

研究報告

学習支援活動における学生の児童理解スキル・信念とその変化に関する実践的研究

◎犬塚 美輪（東京学芸大学総合教育科学系）

佐藤 牧子（東京学芸大学附属小金井小学校）

池田 一成（東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター）

代表者連絡先 minuzuka@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】

学習支援員，児童理解，信念，質問紙調査，インタビュー調査

1 はじめに

情緒や学習に障害を持つ児童をはじめとした，多様な児童の特性を理解した指導を実践することが教育課題として重視されている。個別最適な学習を支援するためにも，児童一人ひとりを理解する姿勢とスキルを涵養することが，教員養成課程においても求められていると言えよう。

このような背景から，教員養成課程の学生が，学校支援ボランティアなどの形で学校教育に参加し，授業などにおいて児童をサポートする機会が増えている。こうした機会が増加する背景として，多忙な教員の仕事を支えるボランティアとしての側面だけでなく，教員を目指す学生が児童を理解するための姿勢を身につけることやスキルを獲得することが教育的な課題となっていることが挙げられる。単なる「手伝い」ではなく，将来教員を目指す学生が，その活動を通してどのようにその認識を変化させているのかを明らかにすることは，教員養成課程における学校支援ボランティアの意味を考える上で重要である。

2 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは，附属小金井小学校の学習支援員の活用に注目し，教員養成課程の学生の児童理解の変化やその変化に関わる要因を探索的に検討する。学習支援員として活動する学生は，特に個別のニーズの高い児童をサポートする役割を期待されている。児童をサポートする活動を通して，彼らは何をどのように学んでいるのか，特に，学校に関わる実践的経験に期待される児童への働きかけ方や児童観がどのように変化するのかは十分把握されていない。また，期待される実践的な学びをサポートする機会や場の特徴は十分明らかでない。そこで本研究では，附属小金井小で児童支援に取り組む学生について，（1）スキルや信念の変化から参加学生の学びの実態を明らかにする，（2）研修やスーパーバイズの効果を学生自身の主観と関わる教員の視点から検討することを目的とする。また支援員の活動を円滑にするための人的物的環境について検討する。

3 本プロジェクトの内容

令和5年度の取り組み

（1）人的物的環境の調査と改善

はじめに，学生の活動状況や必要としている学習リソースについて聞き取りを行い，学習支援員の活動を

支える人的物的環境を検討した。学習支援員からは①児童の個別サポートにおいてタブレットが有効であると認識しているが、一方でそうした機器が十分ではないこと、②活動に際して具体的なフィードバックを得る機会が少ないこと、③必要な知識を得る機会が少ないことが示唆された。改善が容易な物的環境（書籍やタブレットなど）については、量を増やすとともにアクセスが容易になるように工夫し、学習支援員がいつでも用いることのできる教材と支援員の学習リソースを充実させた。

(2) 学習支援員としての変化：質問紙調査

■ 方法 学習支援員の活動に参加する学生 10 名を対象とした質問紙調査を実施した。学習支援員に活動を始める前と比べて自分がどのように変化したか、質問項目への回答を求めた。

■ 結果 内容が類似している項目をまとめ、現在とが活動初期の自己評価の差得点を「学生の成長得点」とした（図 1）。成長得点と活動期間の長さの相関を算出し関連を調べた。

① 個への注目の成長得点

「子供の意見をできるだけ聞く」「頑張り気が付く」といった個々の児童の行動に注目する項目については、ほぼ全員が「増えた」と回答していた。活動期間との相関係数は正の値（ $r=.325$ ）であったため、活動期間が長いほど個々の児童に注目すると回答していることがわかる。ただし、活動期間が短い場合も得点が高く、比較的短期間の活動で多くの学生に認識されると考察できた。

② 指導スキルの成長得点

個別の支援において重要だと考えられる具体的な指導についての項目（「子どもが学習しやすい環境か考える」「子どもに学習内容を説明させる」）は個人差が大きかった。活動期間との相関もほとんど見られず（ $r=.002$ ）、長く活動することが望ましい方向への変化につながるとは言えなかった。学習支援員としての活動の在り方やその中での学びの機会を増やすことが必要な側面だと考えられた。

③ 戸惑いの成長得点

「児童の反応を想定外だと感じる」「子どもが思ったように反応しないことに戸惑う」といった項目は正の値を取り、平均的にこうした経験が増えたと回答していることがわかった。活動期間との相関も正の値（ $r=.352$ ）であり、長く活動するほど戸惑いが生じていることが示された。直観的には、長く活動するほど、そうした経験が減るのではないかと考えられるが、実際にはある程度長く活動することで児童の反応に予期を持ったりするようになり、それとは異なる反応が返ってくることを経験するようになるのだと考えられたため、次年度にインタビューによる詳細な調査を行うこととした。

以上より、具体的な児童への働きかけのあり方に学生間の差が大きく、活動期間によって一定の変化が生じるとは言えないことが示唆された。また、活動が長期間になる学生ほど、子どもの反応に戸惑うという回答が多い傾向が見られた。

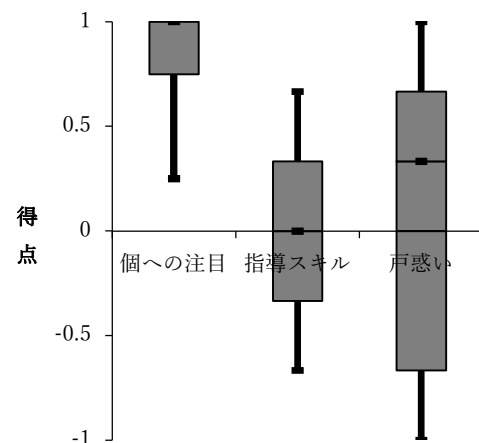


図 1 学習支援員の成長得点

令和 6 年度の取り組み

(1) カンファレンスの実施

学生から要望のあった知識獲得やフィードバックの

機会を作る試みとして、個別児童について取り上げるケースカンファレンスを実施した。カンファレンスでは、教室で学習に参加することが困難な児童について、アセスメントや個別指導を実施した経緯、アセスメントの内容の解説、個別指導での取り組みと成果について取り上げた。参加した学生からは、「児童の状況がよく理解できた」「特に配慮が必要な児童の特徴が分かった」といったコメントが寄せられた。一方で、普段の教室では介入が困難であることや、カンファレンスへの参加のしにくさが課題として残った。

(2) 学習支援員の変化：インタビュー調査

令和5年度の調査を踏まえ、児童への働きかけや認識に違いが生じる背景として、学生自身の動機づけや周囲からの指導・サポートのありかた、活動中の学生自身の取り組み方や認識の実態を捉える必要と考えられた。そこで、個別の学生の活動実態を詳細に分析するための調査を実施した。

■方法 学生10名を対象とし、個別に半構造化面接による調査を行った。面接では、(1)活動に参加した経緯、(2)普段の具体的な活動と活動を通して感じていること、(3)得られているサポートと必要だと思うサポート、(4)自分自身の変化の4点について質問し、自由に語ってもらった。

■結果 面接プロトコルを文字起こしし語られた内容を分析した。主要な3点を示す。

①参加動機

学生間に大きな違いがなく、教育実習での経験を経て「もっと知りたい」と感じたということが共通して挙げられた。

②サポート

活動経験の長い支援員の働きかけや振る舞いが重要なサポートとして共通して挙げられた。また、教員からのフィードバックや具体的な指摘も肯定的に言及された。ただし、これを「十分に得られた/得られている」とする場合と「もっと活動経験の長い支援員と組んで活動したい」と現状では十分ではないことを示唆する場合があった。

③活動とその変化

認識や行動が変化したことがすべての対象者から語られた。個々の児童の特性や性格を把握できるようになったこと、そうした個性に応じた働きかけが共通点として挙げられた。興味深い点として、活動初期の学生が「児童を望ましい方向に促す」ことを多く述べたのに対して、長期間活動している学生が「諦め」という言葉で「児童を意図通りにコントロールできるわけではない」と語った点であった。

以上のように、得られた回答からは、周囲からのサポートやコミュニケーションが活動のあり方に影響していること、また児童への働きかけが（少なくとも初期は）「望ましい行動を取らせる」ことに焦点化されていることが読み取れた。活動を通じて、意図通りの行動を取らせることの難しさやそれ以外の意味・価値を見出すことが学習支援員の成長として位置づけられるのではないかと考えられた。

4 本プロジェクトの成果と課題

(1) 本プロジェクトの成果まとめ

本プロジェクトを通して、附属小金井小学校における学習支援員活動を通しての学生の成長の実態について以下の知見を得ることができた。

第一に、学習支援員の活動に参加している学生の成長過程には、「児童を想定している通りに動かす」とい

うコントロールの視点から、その難しさやそれ以外の意味や意義を認められるようになることが関わっていると考えられた。活動によって、順調にスキルを身につけるというより、視点が変化することが意味を持っていると考えられる。活動期間が短い場合には、こうした移行が十分に見られず、「どうすれば児童の望ましい行動を引き出せるか」という点に注目しやすいと考えられた。

第二に、学習支援員の活動を支える要因として、より活動期間の長い支援員や教員からのアドバイスやフィードバックの重要性が示された。上述したような学生の視点の変化を促すような経験やサポートが重要だと考えられる。

(2) 本プロジェクトから示された課題と提言

本学の教育実践について 調査において、大学での学修との関連を述べた対象者はごく少数であった。実践と理論の往還を推進するには、実践の場で学修内容に立ち返ることができるような仕組みを検討することが有益だと考えられる。

附属小金井小学校での学習支援員活動について 教員との情報共有が十分だと感じる支援員と困難を感じている支援員がいた。現状では、支援員の対人スキルに依存しているところがある可能性がある。活動開始時や終了時に短時間でもコミュニケーションをとる機会を設けることが有効だと考えられる。

公立小学校などにおける学校支援ボランティア一般について 附属小金井小学校の場合は、学生が同校での教育実習を経て支援員となるケースが多く見られた。通常の学校支援ボランティアでは、そのような経緯を踏まえている場合は少なく、他の支援員や教員からのサポートが得ることがより難しいと考えられる。児童の性格や特性を理解するためにも、教員とのコミュニケーションの機会を設けることが附属学校以上に課題となるだろう。